支那の誕生

H. G. Creel,

The Birth of China — A Survey of Fo mative Period of Chinese Civilization — (London, 1936. pp. 395)

本書は支那の誕生と題し形成期の支那文化の研究と副題されてゐる。著者は支那文化の基礎は大體に於て

春秋の初葉紀元前六〇〇年頃迄に一應完成したと考へ殷代より此の時期迄の支那古代文化史の概觀を與へんとしたものである。西洋人の一般讀書階級を目標としたものであつて、直接に支那の原文を引かず、極めて簡單な註が卷末に一括して附せられ、文獻目錄等も極めて略であり、外形からすると一の通俗入門書に過ぎぬ。然し異國から遙々北京に甲骨文金文研究の爲に留學した著者が四年間の研究の結果たる Studies in Early Chinese Culture—その一部は On the Origins of the Manufacture and Decoration of Bronze in the Shang Period として Monumenta Serica Vol. I. に載せられてゐる—の要約であつて、內容からすれば一個の專門書である。第一篇發掘、第二篇商、第三篇周の三篇より成り、更に二十五章に細分せられる。第一篇に於て、著者は先づ第一章を甲骨と題し、近東の古代史に於けるエジプトの象形文字の發見解讀に比すべき劃期的な事件とする殷墟の甲骨文の出土及び研究の歷史を概說、第二章は中央研究院による殷墟の組織的發掘の經過を述べ、第三章支那文化の起原は支那各地に於ける先史時代の遺跡發掘の結果と對照することによつて殷墟の文化の位置を定めんとする。

氏は一九三四—五年の殷墟特に侯家庄に於ける殷王族墳墓の發掘を實地に見學し、又中國の考古學者或は甲骨學者との絕えざる接觸によつて、その後の發掘狀況、その調査研究の成果を聞知するを得、直ちに之を取つて所論の重要な根據とされてゐる。第四冊を出した以後、田野發掘報告に一部分見える以外絕えてゐる殷墟發掘の報告は吾人の鶴首待望する所であるから、之に關して本書の到る處に散見する記事は、特に中央研究院の發掘當事者より著者が直接に得た知識なるが故に、稍吾人の渴望を癒やすものがある。第三章に於ける梁思永の洩らした侯家庄王墓より發見せられた千餘體の人骨の計測研究の豫報、之が蒙古人種の特徵を有するとの事の如き、(五十一頁)第五章生活資料に於て利用されてゐる Teilhard 及び Young 兩氏による殷墟發見の多種の獸骨に就ての生物學的研究の如き、(七十六頁以下)はその一例である。甲骨文の解讀研究は支那の甲骨學者の努力によつて近年異常の進歩の途上にあり、支那の學術雜誌に每號關係の論文の載せられざるはないと云つても過言でない。其の結果を批判

し消化することすら實は容易ならぬ事業である。朱芳圃の甲骨學商史編の如き、無批判の剪採に過ぎず、且つ既に時代遲れである。著者は甲骨文の研究を主要な目的として支那に留學したのであつて、稍支那の學者の研究を受入れ過ぎた點がないではないが、前述の如く此の點が寧ろ本書の長所だと云へる。然し、單なる銘文解讀に滿足せず、殷墟の遺跡遺物に對する現在の知識を一般支那先史學の業績と連關せしめ殷墟文化を全體的に理解せんとしたのが第一篇第二篇を通じた著者の態度であつて、相當野心的な試論と云へる。

第二編商代篇第四章「大都市商」は殷墟遺跡の地理的叙述に始まり、遺跡、特に建築遺構を通じて商代の首府の狀態を想像する。第五章生活資料に於て、甲骨文によつて殷代の食料を考へるが、殷墟發見の獸骨、その他の生物學的な研究が參照せられる。茲に於て卜辭に見える祭祀に牛羊豚犬が犧牲とせられること、及び狩獵の記事から殷代を以つて狩獵游牧時代にありとする支那甲骨學者の說は餘りに無批判的なりとして、寧ろ農業が主要產業で狩獵游牧は從屬的なりとの立場を取る。第六章は石簇骨簇、或は土器を通じて殷の「手工業」が窺はれ、第七章「彫刻及銅器」には先づ殷墟住居跡發見の柱の基部の人體彫刻、特に侯家莊發掘の鳥或は獸形の彫刻を論じ、殷に於てかく發達した彫刻——單なる浮彫でない完全な彫像——が周代に於て同種のものを見出し得ないことから、周代に於ける彫刻技術の喪失を一の問題としてゐる。次に殷墟の銅器に就て、その鑄造技術の優秀なることを注意し、之に現れる文樣特に饕餮の象徵的意義を論じ、祈年祭に於ける魔術的祭儀に於ける犧牲たる牛或は他の家畜を象徵するものではないかと云ふ假設を提出してゐる。第八章「商代社會」は先づ郭沫若氏等の稱する卜辭に於ける先祖、祭祀、その世系に於ける兄弟承繼制或は金文に見える親族稱呼から、商代の親族制が母系氏族であり或は亂婚制なりとすることに反對する。第九章「商の國家」に於ては、商の國家組織に就て、侯或は子等の名稱は卜辭に見えるが封建的な君臣關係を基礎とする完全な封建制度は尙未發達であり、之等は要するに地方的な氏族に形式的に稱號を與へたに過ぎないと見る。從つて商の國家の勢力の實際に及んだ範圍は安陽を中心とした極めて狹小な地域に過ぎないとする。第

十章「戰爭」は殷墟出土の武器及び戰車遺物を中心に商代の軍制、武力を考へ、商の軍制は車軍は步軍に比して遙に少數であり、又弓弩の射術の發達からして、支那に於ては歐洲中世に於けるが如き重甲を帶びた騎士階級の存在の可能性少きことに論及してゐる。第十一章は「文字」に於て甲骨文字の解說をなし、商代に於て神に告げるには特に書かれた文書が用ひられる風習のある事に注意する。第十二章「商の神」に於て殷代の埋葬法に言及して、殷墟及び河南の濬縣の周初期の墳墓に於て棺が使用されず、單に死體に布を纏はしめるに過ぎないことが指摘されてゐる。又卜辭に見える祭神の內「帝」字の意義に就て、明義士氏の說を引いて、元來は犧牲を火で燒く一の祭法に過ぎない帝が祭られる神の名に轉化したので、商の王室先祖の集合名稱であるとの說を出してゐる。第十三章「神の告」は卜法を論じ、第十四章「犧牲」は卜辭により種々の祭法を述べ、最後に一九三四—五年の侯家庄殷王墓に於ける多數の頭蓋と身體と別處に葬つた人骨の發見を報じ、之より卜辭に見える人身供御の記事と參照して殷代に於ける大規模な戰爭捕虜を犧牲に供する習俗を述べる。特にその犧牲とされる者を羌と呼んで居ることから、之が周族の根幹をなす姜姓の氏族と相應し、羌とは羊を牧畜する人種であり、おほむね西北方山地に住居して、主として平原の牛を牧畜する殷民族とは絕えず牧場を爭奪し敵對關係にあつたとし、殷の末期帝王が東方征服に軍を出す際に乘じて、此の種族を代表する周の進軍によつて殷が滅亡する事が述べられてゐる。

第三篇「周」に於ては、第二篇の殷代の如き據るべき遺跡の發掘がない爲に、その記述は主として既存の文獻に賴つてゐるが爲に前篇の如き生彩がない。唯、第十五章「周の民族の起原」に於て殷周の交涉が割合に新しい時代に屬することを論じた點、第十六章、周の殷征服の動機として文王の妻となつた商族の女による商文化の鼓吹と陝西に於ける凶年の影響を指摘した點等が興味がある。又第十八章「考古學」に於て、著者自身踏査した河南濬縣の周初衞康叔時代の古墓の發掘遺物特に銅器を安陽のそれと比較して、周初器物は殷器を模しつゝも技術的には墮落し、殷器に於ける力强さは粗雜さとなり、簡潔さは單なる平板に流れて仕

舞つた事を論じてゐるのも注目に値する。

既に述べた如く、最近に於ける甲骨文及び金文の學の目覺しい進歩、殷墟發掘の結果を綜合せんとした本書の大膽な試みは、今紹介した如く相當に成功してゐる。勿論著者の發掘實地經驗、遺物との接觸、支那考古學者甲骨學者の助言と協力とが與つて力をなしてゐるので、何處迄が氏の獨自の新說か判じ難いものがある。恐く氏は更に之等からの斷片的な知識を豐富な想像力によつて一卷の書に纏められたのであらう。

吾人は以下二三の點を摘記して氏の敎を請ひたい。氏は卜辭に吉凶を問ふ相手となる者を殷の先祖及びその他の精靈だと考へられてゐる(二十四頁)。卽ち祖先の精靈に吉凶を問うたと考へられてゐる。然し、例へば上甲に土方と稱する外國の征伐を告げるの吉凶を卜する卜辭の如き、「貞告土方于上甲」と書かれてゐる。之に於ては上甲に告げる事の吉凶を判ずるのは、祖先神上甲自身でないことは明瞭である。そこで祖先の綜合神とされる所の帝をその判定者と云ふ假定を立てるより外に仕方がない筈であるが、氏は別に何等の說明もされてゐないが、之は尙考ふべき餘地を存するのではないか。又殷周の關係が可成り新しい時代にあつたとされるに當つて、卜辭に見える殷が周を討つた記事を曖昧とし、又その時代が不明だとされてゐるが、氏も信奉される董作賓氏の斷代研究の卜人書體からする方法を適用して見ると、第一期武丁か遲くとも第二期を下らないことは一見して判定出來る。氏は殷代末期の金文彫骨文の字體と周代の金文との類似から、周は殷代末期の文字の影響を受けてゐるとして、殷周交涉の遲い一の證據とされてゐる。然し、殷代の銅器に於て既に早期の銘文乏しく、第一期甲骨文と同じ字體のものを發見するに苦しむ、況んや殷代制作の周の銅器に於て之を求むるは更に難いのであるから、之から直ちに上述の結論を引き出すのは早計ではなからうか。

(小川茂樹)